説教要旨「一人一人に手を置いて」

ルカによる福音書４章３８～４４節

安息日の会堂での礼拝を終えて、イエス様はシモンの家に入られました。シモンは姑の病気という苦しみ、心配事をかかえた自分の家にイエス様を迎えて、救いを願いました。私たちは礼拝において、神様のみ言葉を聞き、主イエス・キリストによる救いの恵みを示されます。シモンがこの日の礼拝で、悪霊に取りつかれた人が癒されるのを見たように、私たちも、共に礼拝を守っている他の人々と共に、み言葉による救いを体験するのです。その体験を与えられて、私たちはそれぞれの日常の生活へと帰って行きます。そこには様々な問題、苦しみや悲しみや不安があります。何の問題もなく、準備万端に整えられたところではなく、準備が整わず、問題を抱えたままの私たちの家に、つまり日々の生活の中にイエス様を迎えて、そのみ言葉を聞きつつ歩んでいくことによって、私たちは支えられ、力づけられ、癒され、導かれていくのです。礼拝は、私たちの具体的な生活と切り離された別の世界の事柄ではありません。礼拝においてイエス様の救いのみ言葉を聞く体験をしているからこそ、日々の生活の中で、自分自身の具体的事情、悩みや悲しみや苦しみの中で、力ある救いのみ言葉として聞くことができるのです。

私たちが抱えている問題、悩みや苦しみや悲しみ、心配事は、ここでイエス様のところに集まってきた当時の人々とは違っているでしょう。また私たちの間でも、人それぞれに皆違った問題を、悩みを抱えているのでしょう。イエス様はその私たち一人一人と出会い、一人一人に手を置いて、私たちを解放し、新しく生かそうとしておられるのです。私たちは礼拝において、主イエスの十字架の死と復活によって実現した救いの恵みを告げるみ言葉を聞きます。そして、イエス様をお迎えして歩む日々の生活の中で、その救いの恵みを、それぞれの具体的事情の中で体験していくのです。

（２０１８・６・１０　説教者：稲垣真実）